

「6年間を見通した漢字指導

ミチムラ式漢字学習法の合理性と根拠+友達との学び合いの中で特別支援への配慮と工夫」

平成30年7月28日(土) 県内各地から漢字の苦手さのある子どもたちに向き合っている専門家が集まり道村静江先生の講演をききました。

「漢字が書けない子に書かせて覚えさせようとしていませんか?」「とめ・はね・はらいなど細かいことにチェックを入れ、漢字嫌いにさせていませんか?」という先生からの問いにハッとした先生方も多くいらっしゃいました。

道村先生の教えてくださった漢字学習方法は「書かずに口で言って覚える」ものでした。

最初こそ半信半疑でしたが、実際に「鬱」という文字を見ないで唱えて書けた時には大きな驚きと高揚感がありました。

6年間のうち最初の3年間で基本漢字を習得してしまえば4年生以降の漢字学習は非常に楽なものとなります。これは漢字の読み書きいずれにも言えることです。

音訓読み学習を分けずに、新出順にこだわらずに、「漢字を使うこと」が求められてくる5・6年生を見越しての学習体験が子ども達には必要です。

また、漢字学習を一人の学習で終わらせずに友達と一緒に学び合うことで発見が増え、語彙力が伸びていきます。

十人十色な子どもたちがいる教室で指導者が学び方の選択肢を複数提供できるなら、子どもたちは公平な学びを得られるのではないのでしょうか。

インクルージブ教育を前に、私たちは学びの多様性を再度考え直さなくてはならないと感じました。